

(別紙2)

審査結果の要旨

氏名 木田 直人

本論文は、17世紀フランスの哲学者マルブランシュの理説である自然的判断理論の生成と発展とを論じることを通して、マルブランシュ哲学を、(現代現象学の思考とも通じる) 日常的な生を根底から支える自明性の次元の解明の試みとして提示したものである。「全ての事物を神の内に見る」という言葉に象徴される神中心主義的なマルブランシュの思索は本邦においては本格的な研究の対象になって来なかったが、研究の欠を埋めるに留まらず、自然的判断理論に焦点をあてることによって、その哲学的意義を存分に解き明かした点に本論文の独自性がある。

序章において基本的問題設定と本書全体の結構を簡単に提示した後、第一章において、主に『形而上学と宗教についての対話』を分析の対象として、物体認識に関する理論的条件を解明する。マルブランシュの認識論においては物体知覚が図-地の関係として把握され、「全ての事物を神の内に見る」という理説の中核をなす神の内なる「叡智の延長」が、物体知覚に対して延長性一般を付与するという地の役割を、この地に対して個別的にして感覚的な図を書き込むという役割を「神の実効性」が、それぞれに担うこと、さらに、後年の議論においては、叡智的延長が一般性と実効性という二つの規定を獲得することによって、物体知覚が「全ての事物を神の内に見る」という理説のみによって説明されるに至る、という事情が精緻に解明される。

物体認識に関する理論的条件についての以上の解明を受けて、第二章においては、主に『真理探究論』の生成史的検討を通して、物体の形状、距離、あるいは光や色、さらには食の選別といった具体的な物体認識の成立に関するマルブランシュの議論の意義を、自然的判断理論の発展・展開に探る。『真理探究論』第1版における、私たちの精神が不可抗的になす判断という意味での自然的判断から、第2版以降における(私たちの精神において) 神のなす判断としての自然的判断への理説の発展・展開に見られるのは、第1版にもともと含まれていた自然主義、それも生命原理に内包されるような自然主義の顕在化であり、この生命原理は、現象学的身体という意味での世界への適応性を実質的には意味するものであることが、これまた精緻な分析によって解明される。生命原理に支えられた自然的判断理論は、私たちの生の基盤たる安定性を根本から支える自明性を浮き彫りにするものである。

第三章は、もっぱら物体認識の場面において生成してきた自然的判断理論がマルブランシュの秩序論・価値論に発展していくさまを検討する。マルブランシュによる秩序論関係テキスト総体を対象として、自然的判断理論と通底するような、秩序と関わる意志論・自由論の検討を経た上で、美ないしは善の認識の扱いを検討することによって、自然的判断理論の内実が、生命の保存という局所的価値の場面を超えて、美的・倫理的価値を含む価値的生一般へと拡充されていることを示し、自然的判断理論の理論的射程を解明する。

このように、本論文は、自然的判断理論を分析することを通して、マルブランシュ哲学総体を貫く哲学的意義を解明した独創的な研究である。その細やかなテキスト解釈は、自らの思索に裏づけられつつ、テキストの微細な違いを丁寧に腑分けすることによって、個々の理説の展開の意義を鮮やかに浮かび上がらせるものであり、その哲学史的な密度は極めて濃い。他方、その思索は単に哲学史の分析に留まるものではなく、バークリやトマス・リードの理説との対比をも織り込みながら、最終的には、世界に内属する私たちの世界内存在のあり方を支える自明性の次元の重要性を事柄として解明するものであって、事柄に迫る哲学的な分析を迫力ある仕方で示している。他面、90年代以降の研究書の参照が若干不十分である点、第三章の分析が事柄としてやや平板に終わっている点など、もの足りなさはある。とはいえ本論文は、マルブランシュ研究における画期をなすものにして、私たちの日常性の基盤を解明する哲学的な思索の結実である。よって、本論文は博士(文学)の学位を授与するに値すると判断する。